

同人誌「屋上」

発行所：信州書房 発行人：北沢喜代治

転載

埋葬

田中光二
(たなか 踏基)

昭和三十八年一月二十三日から降り始めた雪は、ついに観測史上第四番目の豪雪となった。連日小止みなく降り続く雪は、二月二日に至って、大雪といわれた一昨年の記録を百八十センチ余りも凌駕していた。

その年、一月三十日一晩で降った積雪量は、三百十八センチ、二月二日は、三百九十六センチで、昭和三十六年の最大積雪量が二百十七センチ/日と記録されているから、この年の豪雪がいかに物凄いものだったということは、数字からも想像がつく。

後世俗にいう、この年の新潟・北陸地方を襲った三八(サンパチ)豪雪は凄まじく、新潟中下越の長岡市一帯の「どか雪」の最深積雪量 長岡三百九十六センチ/日、死者・行方不明者二百三十一人、負傷者三百五十六人、損壊戸数六千五戸、鉄道麻痺、生活物資の輸送ストップで孤立地域が続出、直接の被害額だけでも約六百億円以上という惨事となった。ちなみに日本の最深積雪記録は、長野県下水内郡栄村で、昭和二十年二月十四日(一九四五年)、当時の国鉄飯山線森宮野原駅には七百八十五センチ/日、

一月二十三日十六時、新潟発の急行越路が満身雪だらけとなって上野に着いたのが、二十八日八時二十九分。実に百六時間の延着記録を作り、急行佐渡も八十八時間の延着になったと新聞は報じているが、本格的に雪が降り始めたのは二十七日以降であり、三十日、二月一、二日には、列車はおろかあらゆる陸上交通機関は完全に麻痺状態を示した。そのため雪国でも、街場ではもう

町村全体を没し尽くしてしまうのでは思わせた。積重なる雪のため電線を跨いで歩く異常事態が実際に現出し、地域は完全に陸の孤島と化したのである。この地方に災害史上始めて、雪害による災害救助法が発動され、自衛隊員三千名が派遣された。男も女も老人子供までが、連日のように雪下しと雪上げ雪掘り、で明け暮れた。屋根の雪を下ろす余地がある内はそれでも下ろすだ

みられなくなつた長櫓を引き出して、その上に屎尿桶を載せて運ぶ人々の姿を、雪が小止みになった時には、上空の曇り空に自衛隊の救援ヘリコプターが二、三機姿を現して、空から援助物資を投下してはまた何処かへ飛び去つていった。

雪は、家々の玄関を塞ぎ、窓を塞ぎ、軒を塞いだ。雪は、雪室の中に囲つておいた野菜を掘り出すことも困難にさせた。家々の屋根に数十トンの重量となつて押し掛かり、もしこのまま降り続いたならば、そのまま家々を、街全体を・・・やがては郡市

けで良いのだが、次第に下ろす場所もなくなると今度は一転、雪を放り上げたり掘り出したりして生活空間を確保する作業に入らねばならなかった。雪が家々の軒を越えて電信柱の高さになると、人々は始めのうちこそ笑うことを知っていたが、その非生産的労働の繰返しで極度に疲労困憊し、笑うこともなく押し黙って作業をした。正にこの地方独特の白魔と呼ばれる自然の猛威を前にして、人々は次第に寡黙になつていった。このまま数週間、雪の下で我慢の生活を強いられると人々は一から諦め始めていたからである。江戸時代「この下に高田あり」という高札を雪上に掲げた雁木の街高田(今の上越市)の逸話を思い出す。

高田(今の上越市)の逸話を思い出す。

後世俗にいう、この年の新潟・北陸地方を襲った三八(サンパチ)豪雪は凄まじく、

新潟中下越の長岡市一帯の「どか雪」の最深積雪量 長岡三百九十六センチ/日、死

者・行方不明者二百三十一人、負傷者三百五

十六人、損壊戸数六千五戸、鉄道麻痺、生

活物資の輸送ストップで孤立地域が続出、

直接の被害額だけでも約六百億円以上とい

う惨事となった。ちなみに日本の最深積雪

記録は、長野県下水内郡栄村で、昭和二十

年二月十四日(一九四五年)、当時の国鉄飯

山線森宮野原駅には七百八十五センチ/日、

とてつもない数字と高さを表示したモニUMENTが立っている。鉄道は三ヶ月間全く動かず、人々は文字どおり雪の下で、忍従の生活を余儀なくされたという。

太郎が裏日本のこの街にきて始めて感じたものは、幻想的な雪国の暮色だった。雪下ろしに登った下宿屋の屋根から眺めた微かに淡く赤が暮れ残る西空と、輝き始めた街のネオンサイン、紫色がかった薄い幕の向こうにどこまでも続く白い世界と、一条の刷毛で掃いたような曇天の中に時折覗く青だった。次に感じたものは、深夜のキュンピラキュンピラという除雪用ブルトウザーのキャタピラの音だった。ジーゼルエンジンのタンタン・ポンポンという音が、キャタピラの音に重なって聴こえた。永遠に続く静寂の中を、四小節から十六小節までに広がる、そのリフレインが次第に遠ざかるのを聴きながら、何時も太郎は眠りについた。朝になれば活気を取り戻し、除雪された雪道に音のしない靴跡が無数に散乱し、人々が息づいている証拠を残すのが雪国の常であった。それとお馴染みの雪女伝説であった。小泉八雲の「怪談」に出てくる巳之吉とお雪の話は、越後塩沢の鈴木牧之の描く「北越雪譜」の原風景と重なってこ

そ意味があった。稀にこの地域に赤い雪が降ることがあるという話にも惹かれた。中国本土の黄砂が日本海の雪雲に混ざって、着色した赤い雪が本当に降ることがあるのだという。信州の小都会育ちの太郎は、こうした伝説めいた話と暮色が混然一体を成す中越地域の美しい光景に憧れていた。

あの頃は、雪は降っても止むことを知っていた。それなのに、夢にうなされる網膜の上に、太郎はしきりに取りとめの無い雪国のフアンタジアを探してみた。しかし、そんなものはもう何処にもなく、あるものは重苦しく押し掛かってくる数日の曇天に浮かぶ、永遠の羽毛、羽毛、羽毛・・・ばかりだった。雪下ろしの後には、きまつて両手が棒のようにつっぱり、腰は大きな鉛球を引きずっているように重く、口中が乾いて唾液も出ないのに、ただ頭の芯だけがかつかと火照った。疲れて自分の布団に突っ伏すと、そのまま地底深くのめり込んでしまふのではという錯覚に何度も襲われた。そんな晩は、眠りに落ちてからも、上気した頭をまつ逆さまにして自分の身体が、ざつくざつくと雪の中に埋没して行く姿をもう一人の自分が静観しているという夢をみた。目覚めた時も、布団から不安気に首を出して、周りが雪で囲まれていないことを確認

せずにはおられなかった。

大学は一週間の休講ということで、太郎は老人婦女子の家の雪下しのアルバイトで小遣い稼ぎをする他は何等な術もなく、毎日その下宿屋の二階に閉じこもって生活した。炬燵に入った太郎は背を丸めて眼だけは一点を凝視し、首を前方に投げ出すようにして炬燵板を口で咥えるような姿勢のまま、口に煙草を咥え何度も煙を吐き出すと、今夜もまたよんどころなく連想遊びを始めていた。連想は次の連想を生み、そうしてどんどんと積上げた精神の遊びの中を彷徨している内に、それが次第に陶醉にも似た恍惚感を伴う妄想に変わっていくのを太郎は意識していた。

家庭教師のアルバイトに行かなくてはと、太郎は考えた。それがこの夜の連想の切欠であった。中学三年の片目が不自由な女の子が、『ワカランモン!』という時の憎たらし気な表情を太郎は想い浮かべた。《片目ガヨウ見エマセンデ、ドウシテモ一流校ニ入レテヤンニヤノウト思イマシテ》と、女の子の母親は太郎によくいう。バイト代、週二回で月6千円、交通費支給食事付、この田舎の金持は不具の女の子のために、これだけの条件で太郎を雇っていた。紹介し

て呉れたのは下宿屋の女主人だった。汽車に乗って20分、越後滝谷という長岡から二つ目の駅で下車すると、一番上の兄が馬車で太郎を迎えにくるのが常であつたが・

金をもらうためには、歩いてでもバイトに行かなければと思つた。この雪の中を歩いて行けば、《サゾゴウギデシヤタノウ》という労いの言葉で感謝されることは解つていた。それに無理をして歩いてきてくれたことを恩にきて、少しは金を余計に呉れるかもしれないと太郎は考えた。ともかく行かなくて金にならない。例えこんな時の太郎の来訪が迷惑がられたとしても、行かなくては・・金がなかったら、今月分の下宿代をまた待つてもらわねばならないと太郎は思つた。太郎は、バイト先の越後滝谷までの雪道を頭の中で歩き始めた。慣れない深い雪道を歩くことに對する不安が、性急に連想を展開させていた。

雪はたいした降り方ではない。でも狭い踏み固めた幅50センチほどの雪道から足を踏み外したら、腰の辺まで雪に埋まつてしまふ。そんな時、手足をばたつかせてもがいたら、さらに白い沼に中にずんずんめり込んで、ついには白一色の怪物に同化されてしまふ。ゆっくり身体を動かして雪の

中から這い上がらねば。幸いに抜け出すことができる。雪の一本道で向こうから来た人と出つくわした時はどうするか。そんな時は、道の片側の雪を長靴で踏み固めて、自分の身体を支えるのに充分だと思つ程度まで固めたら、その小さな待避所で相手を待つ。幾ら歩いてても雪道は続く。あたりが暗くなる。部落から部落へと急ぐ人の列が前方50メートルにある。前の人の靴跡を付け回すようにして歩く。スッポリと20センチほどの深さの靴穴に突然落ち込んでひどくびっくりする。次にやってくる靴穴に入り込んだときこそ、そのまま埋葬が始まるような気がしてならない。持つているペンライトを点ける。ペンライトの丸い円が雪道に落ちる。人々の持つライトの光が、手の動きそのまま前後に揺れながら動き、白い闇の中を続く。時折前のライトの光と後ろの光が干渉して、雪面を這うのが美しい。足下の丸い光の輪の中に、自分独りだけの世界が始まる。幾ら歩いてても、丸い光の輪は不変で、かえつて不変であることが不安を助長する。雪面を歩きながら、何時の間にか弧を描いて地底深く潜り込んでいく不安である。直径30センチ余りの狭い世界に、女の靴が入ってくる。やっと前を行く人の列に追い着いた安心感で、一寸足

が遅くなる。光の輪を空中に持ち上げてみる。女の尻が光の円の中に浮かぶ。長靴で蹴つ飛ばしてみたくなくなるような、びつちりした女の尻の丸みがそのまま空中を漂つていく。遅い田舎女の尻だ。人の列の長さが見えなくなる。部落に突いた証拠だ。その時、この人の列は何人に減るだろうか。次の雪原に出た時、吹雪にあつたらどうしよう。吹雪に遭つて、雪蛇にやられて行き倒れになるかもしれない。雪蛇は、吹雪の中を歩く人間を襲うという。白くぼーっとかすむ一本の透明な蛇が、雪面を滑りながら這つてくるのを目撃した時はもう遅いのだという。女なら、雪蛇は臍から侵入して子宮を喰ひ千切り、男なら尿道から進入して睾丸を一呑みにして破壊する。時には口から侵入して肺臓を喰ひ破る。吹雪の中で行き倒れになつた人間は、雪蛇に襲われた人間だ。だが、雪蛇に殺される時に苦痛はないという。沈んで行く意識の底に、長いぞろりとした銀白色の細毛の感触を、子宮や尿道、食道の粘膜に感じながら、放心恍惚の内に眠つて行きたい。列を成す人間が五人になる。三人になる。あたり一面、ぼつかりとした人間の恥ずかしい穴が開いていて、その穴の中に列を成していた一人一人がぼろぼろと頭を下にして落ち込んで

行く。前に行く女もやがて落ちていくのだろ。う。やがて二人になる。とうとう一人になる。その時こそ、自分のやりきれない恥辱の穴に、足を下にしてその穴に落ち込んでいくのだ。足の裏の肌色が悲しいけど仕方がない。雪蛇に殺されるよりはまだましだ。でも、雪中に生きながら頭を突っ込んで穴に落ちていくなんて、女の腹の中の胎児じやあるまいし、それに自分が底まで潜っていた、ぽっかりとしたやりきれない穴を、他人に覗きこまれたらもつと恥ずかしい。穴の底に人間が詰まっていることがかろうじてわかる明るさ、まるで蜂の巣に産み落とされた蛆のように、妙に湿っぽい人間の足の裏の肌色が見える。足の裏の肌色を他人に見られることは、自分の一物を見られた時より恥ずかしい。どうせ埋められるなら、昼はいやだ。夜なら他人に覗きこまれないだけでも少し気分が楽だが・・・

太郎は、立上って部屋の電気をつけた。障子を開けて二階の窓から外をみた。窓を保護するために打ちつけた板に遮られ、視界が途絶されていた。でも夜のずーと向こうまで雪があるのは想像できた。それは強引にぶちぬかれた眼窩の中で眼ん玉をきよとつかせる程度の眺め方であった。外界に

ただ不思議な物体が時々空中を擲掬するようになり停止しては、仕切りに舞い降りる白魔を意識せざるを得なかったからだ。切なくなつて太郎は再度連想遊びを始めた。

雪原の至るところに、月面の痘痕のようにぽこぽことした穴が無数に開いた光景がある。そして、穴の底に男でも女でも、子供でも老人でも、ありとあらゆる種類の人間が頭を下にして足をびんと伸ばし、きちんと詰まっているとしたら、それはまるで地蜂の巣のようだ。雪原を引っ剥がして、とんとんと叩いたら詰まっている人間がそのままコロコロと転がり落ちてくる。出てくる様子はまるで地蜂の蛆そっくりだ。蜂の蛆は転がり出ても、生きていて透明な光沢のあるぷるんぷるんした皮膚の下で、盛んに一本の黒い筋を前後に動かすけれど、この場合の人間達はぽとぽと死んで出てくる。どの顔も一様に紫色に腫上がつて、しかも着衣をそのまま雪の中に残したまま素裸で出てくるという迂闊さだ。活気のない老人の肢体にはその皮膚に、うつすらと体液が滲みだした兆候がある。雪の下で冷凍にされていたので腐敗する臭気はない。ひつぺ返した雪面を元に戻せば、依然として降り積もる雪ばかりだ。そこに素裸の死体がゴ口ゴ口と横たわっている。雪がただ降る。た

だ人間の死体の上に雪が降る。

外は吹雪になつたらしかった。窓をがたがたいわせて雪女が太郎を誘惑しにきた。それがひつきりなしのひつっこさで落ち着かせない。雪女伝説を改めて意識する。太郎はこの地にきて雪蛇伝説を始めて知った。その雪蛇の姿を想像してみた。白い透明な胴体をして、その胴体に銀白色の細毛がびっしりと生え、頭には二本の緑色をした触覚がある。実に優しい顔をしていて、これが蛇とは思えない。触覚の丸い緑色した球状の先端からテレパシーを飛ばして、互に意志の交流が可能に違いない。吹雪の中で、襲われる人々の脳裏にテレパシーが聴こえるのかもしれない。太郎はふと見上げた天井の一角に白い点を認めたと思った。蛍光灯の光の中でその点はぼやけてはつきりしないのだが、だんだんと振動しながら大きくなるような気がした。突然白い点がぶらりとした線になり、天井から30センチ余り垂れ下がった。それは、太さ五センチほどの透明な雪蛇だった。緑色のピョロピョロした触覚を前後に動かして、オイデオイデをしている。その赤い小さな目が、女のように優しく微笑している。その雪蛇が、何度もお辞儀をするように頭を振立てたかと思うと、いきなり畳の上まで降りてきた。

始めはゆっくりと、次第に速力を増して、眼前二メートルの所を目まぐるしく天井から畳、畳から天井へと往復した。方向を変える度に銀白色の光がうねるように見事な曲線を描いた。始め、雪蛇は一匹だけかと思っていた。ところが方向を変えてうねる空中に、透明な胴体でガスのように臙気な大小無数の雪蛇が見えた。最初にみた蛇は、

とりわけ素晴らしい胴体を誇っているかのようにだった。雪蛇は次第に数を増していき、やがて天井から何百匹、何千匹という雪蛇の胴体が垂れ下がり始めた。光沢のある無彩色の垂直のうねりが、数えきれないほどの雪蛇の大群となり部屋を埋めた。優しい女の微笑の中で、身体がその胴体に巻きつかれて圧死するような気がした。それも仕方ないかな・・・と思うと急に気が楽になった。余り恐怖心はなかった。雪蛇の美しい透明な細毛の感触を、顔といわず唇といわず、口にも鼻にも感じていた。

太郎は、まるで女の愛を受け止めるかのように雪蛇の愛撫に身を任せ、ぼんやりと虚脱して蛍光灯の光をただ眺めていた。

太郎は、障子を閉めてラジオのスイッチを入れた。ついでに手を伸ばして、蛍光灯の紐を引いて部屋を一段明るくした。雪蛇

の大群が笑いながら瞬時に消えてしまった。二ユースだった。時計をみると、七時五分過ぎで、アナウンサーの傍から誰かが咳き込んで訴えるように叫んでいた。

《モウ、連日連夜ノ雪堀リデ、疲レマシタ・・・ソレニ野菜ガ値上ガリシテ、大根ガ切身デ売ラレテイマス・・・困ルノハ屎尿ノコトデス・・・》

太郎は、煙草の煙と一緒にまたしても生臭く沈殿してくる憂悶を振り払うように、両手を空中に放り出して精一杯の大きな伸びをした。さらに、手を上げたまま最後に身体を揺すって二、三度屈伸運動をすると、股座でえらくたよりない自分の分銅がふらふらと揺れるのが解った。太郎は股座に手をつつこんで、不確かな物体を空中に暴露するとその一物を眺めた。自分の手でそれを思い切り引き伸ばし、どんどん引き延ばし、お船祭りのときの綿菓子のように、白い糸に引いて細く空中に張り巡らせるほどにまで、自由自在に引つ張り回す。それが、透明な糸になったら、三本撚り合わせて丈夫な綱にする。その綱をぐいと空中に張って、エイヤッと気合鋭く剃刀で切離すと、あおりを喰らって一物が千切れて自分の身体が50センチ後方に引っくり返る。そこに快感があるのだが・・・それが本当に

できたらどんなに良いか知れないと太郎は思った。何時の間に尿道から雪蛇が体内に進入していたのであろうか、勃起した一物の先端から白い精液がいきなりほとばしり出た。雪蛇の精液が畳に散った。

空しい不確かな物体を、完全に暴き立てられないまま、仕方なしに紙で拭って元の股座に納めると、太郎はその上を手でゆっくりと何度も撫でた。太郎は、張り詰めた精神の緊張のあと弛緩していた。酷寒の静寂とは異質の、平和な女の優しい充実感を渴望した。どうしたら、心の底にその充実感を見出せるのか。雪の中に埋葬される前に、身を躍らせて降りしきる外気に身体を晒してみようか。下半身を外に出したまま、積もる雪の中に顔を突っ込んで潜ってみようか。雪の結晶が頬に刺さって、充実感を得ることが出来るかもしれないじゃないか。雪の中で、眼を開けたままでいよう！眼の中で雪の六花がチカチカと鋭く突き刺さり、やがてヒリヒリと眼が赤く充血してくるだろう。でも雪上をもがきながら残された下半身のぶざまさはどうだ！

こんな調子では、自分の感覚は正常で健康なまま埋葬されてしまう。どうせ埋葬されるなら、自分の感覚をもっと研ぎ澄まして、正常の限界の外に置いてみたい。こん

な連想は余りに普通過ぎて詰まらない。正常とか、健康とかいう言葉は、安定とか平凡とかいう言葉と同程度の魅力しかない。もつと異常に感覚を研ぎ澄まして埋葬に備えたい。所詮、偽悪者ぶつてはいるが、極普通の人間の連想の域を一步も出ておらず、そこに安閑としている。苛立ち紛れに、正常とか異常とかいう考え方が良くないのだと疑いだした。世の多くの類型的な人間からみたら、アウトサイダーは異常に見える。だが狂人は自分こそ正常だと主張するものらしい。動物園の虎は、檻の中に入っている人間どもを眺めているのだと錯覚することもあるに違いない。正常と異常は立場の相違による相対関係だと思った。インサイダーの大部分は正常で、アウトサイダーの微分小的部分が異常だと決め付けるのは馬鹿なことだと思った。太郎は、自分が今特別に優れた頭脳を持った天才であるがごとく錯覚に陥つてのぼせ上がっていた。

太郎は、ふとラジオのニュースが終わっているのに気付いた。《可愛いバイビーハイハイ・・》抑揚が効いた《ハイハイ》というところが特に良いと思った。ハからイに上がってまたハイと下がってくる。えらく頼り無い甘えた声でハーと息を抜いた後に、電気オルガンのピコピコとしたシン

コペーションの間奏が入る。また歌が始まるが妙に鼻声だ。その《ハイハイ》の歌が終わってしまう。《ハイハイ》の他の歌はどれもくだらない。もう一度《ハイハイ》が聞いてみたい。自分で真似して二、三度《ハイハイ》と呟いてみる。《ハイハイ》こいつはいいやと独語する。しつくりと胸に落ちてくる。一人で色んな抑揚を付けて《ハイハイ》をやってみる。ハと上げた後でイと下げてその高さでハイと続ける。ハとイを五秒間延ばしておいて、短くハイと繋ぐ。更に最後のハイのイを民謡の合の手のようにぴょんと撥ね上げる。今度は八から揺するように唸ってイに上げ、ハーイと下げる。口からかくも色々な《ハイハイ》が飛び出すことが面白い。自分の内にかくも多種多様な《ハイハイ》がしまつてあつたことに驚いたりもする。一体何処から湧き出すのか、幾ら使つても使い切れない豊かな《ハイハイ》が沈殿していたことがとても嬉しくなる。どうして今迄この《ハイハイ》に気付かなかつたのか、もつと早く気付けていたなら何とか別の道を歩いていたのではないかと思つた。でも今更仕方ないと太郎は思つた。ラジオの落語の爆笑の声に、ふと我に返つた。

外は吹雪だつた。夜気の中で、時折強く家全体を揺する音がした。裏日本特有の冬

の雷が鳴っていた。優しい眼をした雪蛇が獲物を漁りに出てきているのだろうか。太郎は、白い大きな棺桶の中に満ちてくる湿っぽい鬱積と憂悶を感じた。吹雪が自分の体内を通過しているように感じた。シュウシュウという異様な音だつた。それが下の部屋から聞こえる湯気の音だと気付き苦笑した。《太郎サン! ゴハンヨー 降りテラッシャイ!》

下宿屋の女主人の陽気な声が下から上がってきた。太郎は勢いよく炬燵を出て立上ると大きく伸びをして、時計をみた。七時四十五分になるところだつた。理性の明るみの中で行動していく、醒めた自負心で、落語に合わせて自分の幻想の馬鹿らしさ加減を寛大に笑い飛ばした。

《何ヲ・・・笑ッテルノヨ・・・早く降りテラッシャイ!》

何時までも、物事に感動する心を持っていたいと切に願つた。雪女や雪蛇が混然一体となつて鉛色に暮れ残る雪国の曇天にも、刷毛で曳いたように時折覗く青空にも口マンを願つた。女主人の艶っぽい声に促されて返事をした太郎は、頭を二、三度横に振つた。頭が重かつたが、遅い夕飯を食べるために階段をどたどたと駆け下りていった。

了